味中式言語活動の充実－指導事例集の具体化－

研究の概要

本研究では，学習指導要領改訂の主な改善事項の筆頭に挙げられた「言語活動の充実」のため，本校生徒の実態に応じた学習活動の工夫を探った。その結果，「私」から「公」への展開，学び合う活動の充実などの改善のポイントがわかった。

Ⅰ　はじめに

平成20年３月公示の中学校学習指導要領（以下「学習指導要領」と言う。）が来年度４月から完全実施される。その主な改善事項の筆頭に挙げられているのが「言語活動の充実」である。つまり，すべての教科等において，生きる力をはぐくむことを目指し，基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ，これらを活用して課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力等をはぐくむとともに，主体的に学習に取り組む態度を養うために，言語活動を充実することが強く求められているのである。

本校国語科においても，今回の移行期間中に，言語活動の充実を図るため，「平和に関する複数の資料の読み比べを行った後，スピーチによって意見交換を行う」「古典随筆を手本に現代化・地域化した作品を作る」など様々な工夫を試みてきた。しかし，まだ充実した取り組みとは言いにくい状況であった。

本年５月，文部科学省は，言語活動の充実の具体化のため，言語活動の充実に関する基本的な考え方や言語の役割などを解説するとともに，優れた指導事例を収録した「言語活動の充実に関する指導事例集～思考力，判断力，表現力等の育成に向けて～【中学校版】」（以下「指導事例集」と言う。）を発行した。

この指導事例集では，すべての教科等における指導事例83例が各学年，各分野・領域等にわたり挙げられており（そのうち国語科の指導事例は15例である），今後の授業改善に向けて大変参考になる資料である。

ただし，本校において，この指導事例をそのまま導入することはできない。それは生徒の実態が大きく異なっているためである。したがって，指導事例集に示された指導事例を本校生徒の実態に応じたものに工夫する試みを行うことにした。

Ⅱ　研究の目的

「言語活動の充実」のため，本校生徒の実態に応じた学習活動の工夫を探る。

Ⅲ　研究の内容

１　本校生徒の国語科授業における実態

平成19年以降の全国学力・学習状況調査，平成23年度岡山県学力・学習状況調査の結果及び平素の国語科授業での学習活動の様子から次の３点が特徴的と言える。

ア　国語の授業は大切だと考える生徒が多い。

質問紙調査ではいずれも約90％の生徒が肯定的に回答しており，「国語の勉強が好きだ」と感じている生徒の比率も高いときが多い。また，漢字の練習やノート筆記などにはきちんと取り組めている。

イ　実生活に関連の深い学習活動に対して興味・関心を示す生徒が多い。

中学校生活の中でよく見受けられる言語活動，例えば，学校や道順などについての説明，依頼文・お礼の手紙，高校入試における自己推薦文などには，興味・関心あるいは必要感を強くもっており，積極的な取り組みになる。

ウ　思考力，判断力，表現力に課題のある生徒が多い。

国語科の「活用」における通過率はいずれも岡山県平均を下回っており，特に記述式の設問では無解答率が高い傾向にあった。ただし，２年次より意図的に書く活動を多く取り入れた学年では，無解答率は県平均より低く，授業づくりの課題であることが示唆されている。

また，授業での発問に対して，その場での思いつきだけを述べ，何らかの理由・根拠を具体的に示せないことも多く見受けられる。

２　指導事例具体化への視点と選定

上記１を踏まえ，具体化を図る指導事例の選定を行うにあたって，次の３点の視点を設定した。

ア　生徒の実生活に関連が深く，興味・関心をもちやすい言語活動
イ　自分の意見をもちやすく，その意見を交換しやすい言語活動
ウ　これまでに試みていなかった指導・支援上の工夫が示されている言語活動
エ　「学び合う」「伝え合う」言語活動

この３点から選定した指導事例は次のものである。

第１学年：日常生活の中の話題について報告する事例（話すこと・聞くこと）
第２学年：社会生活に必要な手紙を書く事例（書くこと）
第３学年：関心のある事柄について批評する文章を書く事例（書くこと）

ただし，それぞれの題材（教材）については，生徒の実態を踏まえたものにするため，次のように変更している。なお，その理由の詳細については各実践事例で述べる。

第１学年：体験入部の報告　→　好きな本の紹介
第２学年：年賀状　→　三者懇談の案内状
第３学年：高校紹介パンフレット　→　高校のオープンスクールのポスター

＜実践事例１＞

第１学年：日常生活の中のものについて紹介する事例（話すこと・聞くこと）

１　単元名

好きな本を紹介しよう～聞き手の反応に注意して分かりやすく話す～

２　単元の目標

自分の体験を基に紹介する内容を選んで話を構成し，話す速度や音量，相手に分かりやすい語句の選択などの知識を生かして話すことができる。

３　単元の評価規準

【国語への関心・意欲・態度】

聞き手にとって分かりやすい紹介にするため，話し方や話す言葉に注意して話したり，話し手がスピーチをしやすいように聞いたりしようとしている。

【話す・聞く能力】

話をする場や聞き手の数に応じて，分かりやすい言葉を選び，適切な速度や音量で話したり，他の人の話し方の良さに注意して聞き取ったりしている。

【言語についての知識・理解・技能】

話をする上で必要な音声の働きや仕組みについて関心をもち，工夫している。

４　題材

好きな本の紹介

５　本学年生徒の実態

本校の第１学年生徒たちは，小学校において，スピーチの基礎を大まかに学んでいるが，相手や場に応じた分かりやすい話し方ということに対する意識や技能は十分ではない。

また，授業での発問に対して，発表に対して積極的な生徒が多いが，その場での思いつきだけを述べ，何らかの理由・根拠を具体的に示せない様子も多く見受けられる。実生活の中でも自分の言いたいことだけをまとまりなく話すような生徒が多く，自分の伝えたいことが正確に伝わるように意識して話せる生徒は少ない。

６　指導・支援の工夫

(1) 活用を図る基礎的・基本的知識や技能

ア　考えたことや自分の意図が分かるように，話の組み立てを工夫しながら，目的や場に応じた適切な言葉遣いで話す。

イ　話し言葉と書き言葉を使い分ける。

(2) 指導事例に学んだ工夫

①　相手意識を広げる

スピーチ発表をしていくにあたって，話す内容を準備したらすぐに全体の前で発表という展開ではなく，発表をペア，少人数のグループ，全体の前と状況を変えながら行う言語活動に設定し，相手意識を広げていく方法が良いと思った。

②　練習や修正の場を増やす

教師だけが評価・助言をしていくのではなく，生徒同士が聞き手の反応を見たり直接聞いたりしながら，互いに助言しあうなど話す内容に修正を加える機会があることが良いと思った。

(3) 生徒の実態に応じた工夫

①　ショーアンドテルの採用

聞き手に話すということを意識させるためにショーアンドテルの形をとった。原稿を作らせず，スピーチメモ（資料１－１）としてワークシートを作成し，発表時にはそれだけを頼らせるようにした。ただ話すことに苦手意識をもつ生徒も多いため，メモ作成後は発表の練習や内容の修正をする時間を多く取るようにした。

②　スピーチメモ

分かりやすく話すためには，伝えたいことがきちんと伝わることが大切だと意識させるため既習の話し言葉と書き言葉の違いにも触れ，今回はなぜその本を紹介したいのかということをしっかり考えさせ，スピーチの内容が双括型の構成になるようにスピーチメモの用紙を工夫した。

（生徒の作成したスピーチメモ）

③　モデルの提示と修正の時間

教師や生徒の実演をモデルとして活用してスピーチの改善につながるように，内容や話し方を修正する時間がたくさんとれるようにした。

④　座席配置

話す状況による違いをより意識できるように，ペアや班での発表時には机の配置などの発表形態を工夫した。

⑤　評価のために

事例集では全体発表は各グループからの代表生徒が行うとあるが，それでは全員の評価をすることができない。そこで全体発表は全員がするものとして，それまでのペアやグループでの発表は全体発表に向けての準備や練習であると位置づけた。

7　実践の内容

(1) 指導計画

	学習活動	指導上の留意点
第１～２時	学習の見通しをもち，スピーチの具体的留意点や構成などを学ぶ。	○　生徒に実演させる前に，教師が良いモデル・悪いモデルを示す。 ○　「原稿を読む」のではなく「話す」ということを意識させ，話し言葉についても復習させる。
第３～５時	紹介したい内容を選びメモを作る。そのメモをもとにペアや班で紹介しあい，聞き手の評価を聞き，表現方法や内容の修正を行う。	○　メモの中心に一番伝えたいことを配置することで意識付けを図り，また双括型の構成になるように番号を付ける。 ○　実際に話したり聞いたりする中で，主に「話す音量や速度」に注目させる。 ○　「聞いて分かりにくい言葉」がないか考えるよう指示する。
第６時	修正したメモをもとに全体の前で本を紹介する。相互評価を行うことにより，よりよいスピーチについて確かめる。	○　全体で報告をするに当たり，必要に応じて報告メモを修正させる。また，大人数の前で話すときの注意点を確認させる。

(2) 第１～３時での学習活動の様子

スピーチの学習をしていくことを伝え，簡単にアンケートをとってみると「スピーチはあまり好きではない」「スピーチは苦手だから嫌だ」という生徒が多かった。理由を聞くと「何を話していいのかわからない」「みんなの前で話すのは恥ずかしい」という意見が多かった。しかし，高校入試での面接などを例に挙げて，実生活においても「話す」ということが大切であることなど，こちらが説明する内容は真剣に聞けていた。また今回は好きな本の紹介をすることや漫画でもよいということを伝えると「それなら」とやる気を示した生徒は多かった。

第１時では小学校のときに教えてもらったスピーチで気をつけることを班で話し合わせながらノートに書かせ，それを発表させた。多くの班から「大きな声で話す」「ゆっくり話す」ということが出たが，それらは，際限なく大きければ良いのではないということや，聞き手に伝わりやすい速さが必要あることであることを説明した。また理想的な話す速さについても説明し，実際に練習させてみた。

第２時では前回の復習をしながら，今回のスピーチの条件として「内容（目的)」「方法」「時間」「相手」を示しながら，これらの言語意識をもてるように説明を加えた。また双括型になるように構成を考えるように指導する際には，既習の「話し言葉と書き言葉」の内容に触れながら，音声言語の特性についても説明をした。

多くの生徒はショーアンドテルという方法が始めての経験だった。その説明の中で「原稿を読むのではない」ということを伝えると一様に困惑していた。しかしスピーチメモを作成し，授業の流れの中で何度も練習するうちに少しずつ慣れていったように思う。普段の授業にあまり熱心でない生徒や考えることが苦手な生徒たちも，今回は好きな本を紹介できることが意欲の支えになっていたようで，周りの生徒に教えてもらいながらメモの作成や練習に取り組んでいた。

（スピーチメモを仕上げ，各自の練習をしている様子）

第３時でもスピーチメモの作成や練習をする時間を取った。その後，あらかじめふせんを貼っておいたワークシート（資料１－２）を配付し，ペア発表の方法について説明した。話し手，聞き手と，話し手を評価する記録者の三人組を作ることとその注意点を説明するときには，まだスピーチに不安を感じている生徒もいた。しかし，ここはまだ練習であることやこの後に修正を加えてよくしていくのだということを説明していくらかは意欲を取り戻していた。その修正のヒントとして記録者にはふせんに「良いところ」「直したら良くなるところ」を書くように指示した。

中には保護者に練習相手になってもらってきたという生徒もいた。その生徒に触発されてさらなるやる気を見せる生徒もいた。ただうまく紹介したいという思いからスピーチメモを原稿のように使おうとしている生徒も数人出てきたので，それは本来の目標からずれていると注意を促すなどもした。なかなかメモが完成できない生徒には個別に話しかけ，答えた内容をメモするように支援した。

（ペア発表の様子）
〈どちらも左が話し手、奥が記録者〉

(3) 中心的な授業における生徒の活動の様子（第４時）

本時の目標	○　聞き手にとって分かりやすい紹介にするため，適切な話し方を考えようとする。（国語への関心・意欲・態度）
学習活動	指導・支援・評価における留意点
①　本時の目標を知る。	・　ペア練習から班練習へと進み，適切な話し方を工夫していくことを伝える。
聞き手にとって分かりやすい紹介にするため，上手な話し方を工夫しよう	
②　メモを見てペア発表のための準備・練習をする。	・　前回のペア発表時に聞き手に指摘されたところを意識させ，必要があれば内容の修正を指示する。 ・　なかなか書けない生徒には，具体的な助言を行うようにする。
③　二回目のペア発表をする。	・　話し手，聞き手と記録者の留意点や役割の確認を促す。
④　ワークシートの「分かりやすく話すためには」に記入する。	・　指摘をもらったことで気付いたことや，自分で修正や工夫をしたところを書き込めるよう十分な時間を確保する。
⑤　班発表に向けての説明を聞き，ワークシートの「気をつけるところ」に記入する。 **【評価場面】**	・　班発表では，ペアのときより聞き手に幅ができたことを意識させることによって，声の大きさなどの留意点を確認できるようにする。 ・　同時に六人が話す状態になることに留意を促す。 ・　説明を補うことによって，話し手，聞き手と記録者の役割を確認できるようにする。 ・　最後列の生徒が聞きとれない場合は再度練習できるよう配慮する。 **【評価規準】聞き手にとって分かりやすい紹介にするため，留意点をワークシートに記入しようとしている。** **＜国語への関心・意欲・態度＞（ワークシート）**
⑥　班ごとに発表をする。	・　時間を計ってやりながら，よくできているところ，注意すべきところなどを指摘する。
⑦　本時のまとめをし，次時の連絡を聞く。	・　本時の学習の振り返りを促す。 ・　次回は班発表を終わらせた後に最終的な修正をし，全体発表に移ることを伝える。

二回目のペア発表ということもあり，全体的にはスムーズに活動できていた。前回指摘されたところや自分でやってみて気付いたところなどを生かして，二回目の発表に臨めた生徒は多く，ほとんどの生徒が前回よりうまくできたという思いを感じられたようだった。

しかし，このときには相手に聞こえる声を出すことや相手を見て話すことができていた生徒も，班での発表時には苦戦していた。隣の班の発表者の声が邪魔になってしまうということもあったが，ペア発表のときよりも聞き手が遠くなったことや視線の移動の幅が広がったことなどの状況の変化にうまく合わせていけない生徒は多かった。班発表の前に「気をつけること」を考えさせ，ワークシートに記入させたのだが，やはり実際にやってみて気付いたり感じたりすることがあった。今回は時間の都合で班発表は一度だけしかしなかったのだが，ペアのときと同じように班でも二回目の発表をできていたら，この後の全体発表でもさらに良いものができていたはずである。

（班発表の様子）

（意見をもとに全体発表への留意点をメモする様子）

(4) 学習活動の評価

全体発表での様子やスピーチメモへの取り組み方，スピーチメモ，ワークシートを評価の対象とした。また，当初予定していなかったのだが，全体発表時には三段階での相互評価表（資料１－３）も書かせたのでそれも対象に加えた。

８　成果と課題

今回の活動に意欲的に取り組めた生徒は多かった。そのため全体での発表時には相手意識をしっかりもって話すことができた生徒も多かった。全体での発表に向けて，状況の変化を意識させながら練習をする機会や修正をする機会がたくさん作れた成果が見られたと思う。また聞き手に分かりやすく伝えるために気をつけなければならないことを意識させることには一定の成果が見られたと思う。今後の学習活動や実生活にも生かせるようにしていきたい。

ただ残念ながら，１分間という時間や適切な大きさの声を出したり聞き手を見ながら話したりすることに意識が向きすぎたのか，メモに記入していながらきちんと双括型で話せた生徒は少なかった。ペアや班での発表時にもっと意識をもたせてから練習させる必要があったと感じている。

（全体発表の様子）

＜実践事例２＞

第２学年：社会生活に必要な手紙を書く事例（書くこと）

１　単元名

自分流三者懇談の案内文を書こう

２　単元の目標

三者懇談を行うにあたって，中学校長からの案内文を自分の気持ちを加えた手紙に書き換えることができる。

３　単元の評価規準

【国語への関心・意欲・態度】

手紙文の基本形式に沿って，自分の気持ちを加えた三者懇談の案内文を完成させようとしている。

【書く能力】

自分の伝えたい事柄や気持ちを明確にして，相手に効果的に伝わるように工夫して書いている。

【言語についての知識・理解・技能】

相手や目的に応じて，文章の形態や展開を適切に選んで書いている。

４　題材

自分の保護者あての三者懇談案内の手紙

５　本学年生徒の実態

本学年の生徒には，新しい学習課題に対して興味を示し，意欲的に取り組もうとする姿勢が多く見られる。その反面，学習内容がなかなか定着せず，自分の気持ちや考えを自分なりの言葉で表現することが苦手である。とくに「書くこと」に関しては，語彙が乏しいこともあり，ちょっとした文章を書くにも抵抗感を示す生徒も多くいる。１年次に友人への手紙文を書くという学習を行ったが，普段何気ない会話を交わしている相手であっても，いざ文字で表現するとなると，とたんに抵抗感を示した生徒が見られた。また，テストや問題集の記述式で答える設問では，無回答で済ませがちな傾向も見受けられた。

しかし，いわゆる“座学”が苦手である分，実生活に根ざした学習活動には興味を示す傾向にある。特に今年度は，広島平和学習をはじめとして職場体験学習，立志式等の大きな行事があり，手紙文を書く機会も多いことから，この学習活動が適していると考える。

６　指導・支援の工夫

(1) 活用を図る基礎的・基本的知識や技能

①　相手意識と目的意識

小学校以来，スピーチや作文では相手意識や目的意識を様々に変えて学習してきた。特に１年次では「大人になれなかった弟たちに……」でヒロユキあての手紙を書いた。

②　手紙文の基本形式

１年次で学習した基本的な手紙文形式の書き方が定着しているかどうかということも，この学習を進めていくうえでは大きく関わってくる。

③　記述

１年次では，「少年の日の思い出」で自分の考えや気持ちを根拠を明確にして文章を書いているが，今回の学習でそれを活かすことができると考える。

(2) 指導事例に学んだ工夫

①　友人・先生以外の相手

一般的に友人や先生にあてた手紙を書く機会は数多くあるが，今回は対象を広げ，あまり書くことのない自分の保護者あての手紙を書くこととした。

②　公と私の両立をねらう

案内，招待，依頼，お礼などを目的とした手紙では，日時・場所などの必要事項だけで終始すると，実に味気ないものとなり，書き手の本意が伝わりにくい。そこで，公的な案内文を私情を交えた手紙文に書き換え，公と私との両立をねらうということである。手紙文は，概して私的なものと公的なもののどちらかに大別できるが，今回の学習では，中学校からの案内文という公的なものに自分の気持ちを加えて私的なものを混じえた手紙文形式にすることで，生徒たちが徐々に社会性を身につけ実社会で通用するような力をつけるために大いに役立つと考える。

(3) 生徒の実態に応じた工夫

ア　年賀状から手紙文へ

指導事例には第２学年で年賀状を書くという活動が挙げられているが，今年度生徒たちが改まった形での手紙文を書く機会が多くなることを考慮すると，年賀状よりも手紙文の方がより実生活に関わるのものであるととらえた。

イ　形式の復習

学習内容がなかなか定着しないという実態があるため，カードを用いて手紙の基本形式の復習を丁寧に行うことにした。

ウ　ワークシート

いきなり便箋に書き始めるということにかなりの困難が予想されるため，下書きの前にワークシートを用いて素案を練ってから便箋に書かせることにした。

エ　モデル

どの生徒も学習に取り組みやすくするためにモデルを準備し，タイミングよく示すこ

とを考えた。

オ　交流

言語活動をさらに活発なものにするために，交流の時間を設け，互いの表現の優れたところを取り入れやすくするようにした。

7　実践の内容

(1) 指導計画

	学　習　活　動	指導上の留意点
第１～２時	学習の見通しをもつ。 手紙文の基本形式等を確認する。 学校からの「三者懇談会のご案内」を読み，案内文の形式・内容を確認する。 ワークシートを利用して下書きする。	○　「三者懇談会のご案内」を自分流に書き換えるという具体的な活動を通して，案内文を書く相手と目的を明確にする。 ○　相手の心に届く言葉を書くために，また，自分の気持ちを相手に的確に伝えるために，具体的な出来事を書き加える工夫をさせる。
第３～４時	下書きを推敲する。 推敲したものを友達と読み合って意　見交換し，修正する。 清書する。（完成した案内文は，「読み手」に手渡す。）	○　推敲の観点が，交流の際の観点となるということを確認する。 ○　実際に手渡した相手の反応も踏まえたうえで，学習を振り返らせると効果的である。

(2) 第１～２時での学習活動の様子

①　ア・イの工夫について

まず形式の復習に時間を割いて丁寧に確認した。前文から後付まで「拝啓」や「時候のあいさつ」などと書いたカードを黒板に貼っていきながら，書く順番や配置を再確認した。その結果，多くの生徒が徐々に正しい形式を思い出し，確認することができた。

②　ウの工夫について

ワークシートについても，先行授業を行ったクラスで用いたワークシート（資料２－１）が生徒たちにとっては漠然としているようだったため，視覚的な面と具体性に重きを置いた改良を行い，より生徒が取り組みやすいと思われるものに変更した（資料２－２）。ワークシートの段階で，一般的によく使われるような決まり文句を使わず，家族の普段の生活に応じた時候のあいさつ（例：気温が変わりやすく，花の植え替えや世話が大変な時期ですね。夏になって潮風を体に受け，とても気持ちがいい時期になりましたね。）や保護者の日々の苦労への感謝の言葉（例：いつも仕事やお花の水やり，大変なのにありがとうございます。いつも塾やスイミングの送り迎えをしていただきありがとうございます。）を，自分なりの言い方で工夫させることとした。その際，なかなか思いつかない生徒のために簡単にブレーンストーミングを行い，柔軟な発想で様々な言葉を引きだそうと努めた。ブレーンストーミングを行ったことで，多くの生徒が糸口をつかむことができた。

改良を加えたワークシートを用いたクラスでは，詳しい書き込みができ，それをもとにスムーズに下書きの作業に移れた生徒も多かった。

③　エの工夫について

モデル（資料２－４）は教師自身が書いたものを下書きの段階に示し，筆が進まない生徒を中心に支援を行った。モデルを示したことにより，書くことを苦手としている生徒の多くが方向性を見いだし，作業を進めることができるようになった。ただし，モデルを出したことで，十分力があるにもかかわらず，自分で書きかけていたものを半ば放棄しモデルに頼る生徒も現れ，新たな課題となった。

(3) 中心的な授業における生徒の活動の様子（第３時）

目　標	自分の伝えたい事柄や気持ちが相手に効果的に伝わるように，推敲を重ねることができる。（書く能力）
学　習　活　動	指導・支援・評価における留意点
①　ワークシートをもとに便箋に下書きをする。	・　一般に市販されている便箋に近いもの（B5・17行）を用いて，前文から後付まで体裁を整えながら書くようにさせる。
下書きに推敲を重ね，交流し，よりよい案内文になるよう工夫しよう。	
②　下書きを推敲する。	・　誤字脱字や文法上の誤り，便箋の使い方等で手直しすべきところを見つけられるよう助言する。必要に応じて国語辞典も用いながら推敲させる。 ・　モデルをいつでも確かめられるようにしておき，推敲の手助けとする。
③　下書きを活用し交流する。 **【評価場面】**	・　机間指導をしながら，よく書けているものを取り上げて称揚し，意欲を喚起する。 ・　それぞれの工夫した表記や内容を指摘し合い，自分の案内文の参考になるべきところは取り入れるように促す。また，修正すべきことは適宜メモしていくよう促す。 **【評価規準】** **積極的に交流し，よりよい案内文に仕上げようと推敲を重ねている。　〈観察〉（書く能力）**
④　本時のまとめをする。	・　下書きを読み返し，書き込みの内容などを確認して本時のまとめとする。
⑤　次時の予告を聞く。	・　次時は，下書きに修正を加えて清書することを伝える。

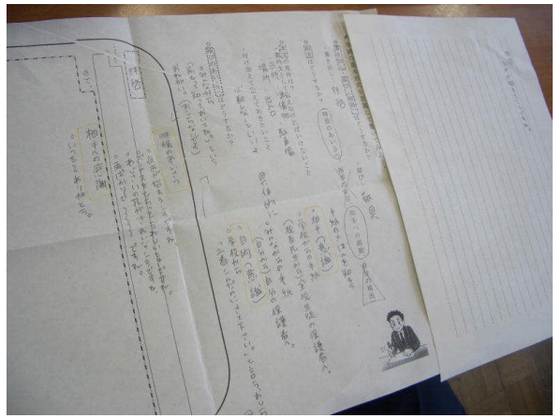
推敲の時間では，教師も積極的に声をかけてまわり，生徒がそうと気づいていなかった優れた言い回しを取り上げて称揚したり，誤りを指摘したりしたことで，他の生徒も刺激を受け，よりよい案内文に仕上げようとする姿が多く見られるようになってきた。ただ，自分の書いたものを読み返す習慣がないと思われる生徒ほど，誤字脱字に気づきにくく，教師が指摘する場面も多かった。

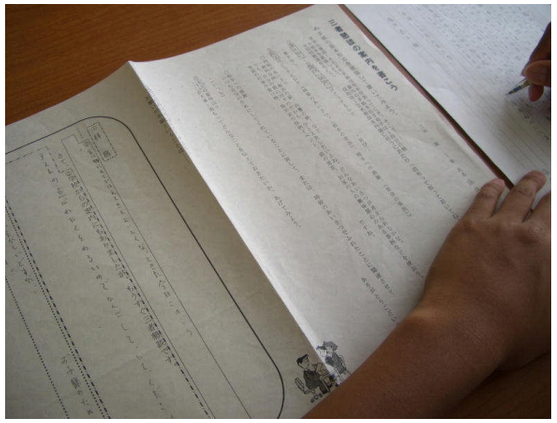
生徒同士の交流の時間には，互いの表現のよいところを取り入れようとする姿が多く見られ，活発な交流が行われた。また，教師が示したモデルにこだわらず自分なりの個性的な表現をしている生徒の周りには，参考にしようと何人もの生徒が集まる姿が見られ，筆の進まなかった生徒も，友達の力を借りながら自分の案内文を仕上げようとしていた。

全体としては交流した結果，多くの作品に工夫の跡が見られるようになったことが一つの成果だと考える。

(4) 第４時での様子

推敲した下書きを清書するという比較的単純な作業であったが，うまく視写できない生徒もおり，自然と互いに教え合う姿の見られたクラスもある。清書を今一度読み返させることで，手紙は相手と目的があってこそのものであるという認識を新たにさせたかったが，生徒たちにとっては，ようやく書き上げたという達成感の方が強かったように感じている。





(5) 学習活動の評価

点数化しづらい題材であることから，授業中の活動の様子や，生徒が活動中にどのように取り組んだかがよくわかるワークシート・下書きの便せん・清書を評価の対象とした。

８　成果と課題

しばしば大人にとっても戸惑いがちな「拝啓・敬具」を用いた手紙文の形式に多くの生徒がなじんできたように感じられる。

しかし，身近な話題を取り上げることで生徒たちが意欲的に取り組むと予想していたが，話題が多くの生徒にとって苦手な三者懇談であるだけに，導入の段階で著しく意欲を低下させることとなってしまった。幸い叱咤激励し，多くのヒントやモデルを示したり，助言を与えたりすることで，ほとんどの生徒は気を取り直して課題に取り組むことができた。今後このような学習活動を行う際には，例えば体育祭や文化発表会など，生徒が活躍する姿を堂々と保護者に見せられる他の学校行事の案内で行うほうが，生徒たちも意欲的に取り組むことができるだろう。また，モデルの示し方についても今後の研究が必要だと考えている。

＜実践事例３＞

第３学年：関心のある事柄について批評する文章を書く事例（書くこと，読むこと）

１　単元名

高校のオープンスクールのポスターを比べてみよう
～高校の先生にポスターについての手紙を書こう～

２　単元の目標

高校のオープンスクールのポスターの中の事柄について，表現の違いやレイアウトの工夫を理解しながら，自分の考えを伝える説得力のある批評の文章を書くことができる。

３　単元の評価規準

【国語への関心・意欲・態度】
高等学校のオープンスクールのポスターの中の事柄について，自分の考えを明確にして批評する文章を書こうとしている。

【書く能力】
自分の考えや評価の根拠を明確にし，説得力のある批評の文章を書いている。

【読む能力】
高校のポスターを見比べ，表現の違いやレイアウトの工夫を文章の中で指摘している。

【言語についての知識・理解・技能】
ポスターに使われている多様な文字や写真（イラストなど）に関心をもち，敬語を意識しながら，高校の先生への手紙を書いている。

４ 教材

・高等学校のオープンスクールのポスター（12校分用意する）
・デザインやレイアウトに関する資料

５　本学年生徒の実態

本学年の生徒の国語に関しての能力や興味関心は男女差が大きい。どの領域についても関心の度合いや能力的な個人差はあるが，グループでの学習活動は好きな生徒が多く，日常の授業でも班で音読をしたり，文法などのドリル的な学習をしたりしている。

「Ｂ 書くこと」では，長文を書くことに個人差，男女差が大きい。とくに男子の中には，「自分の考えや気持ちを根拠を明確にして」書くことを小学校のときより苦手としている生徒が多い。彼らは，書く活動そのものに慣れる段階であり，自分の書いた文章を自分自身で読み返してより分かりやすい文章にしたり，他の人との交流を通して自分の考えを広げたりするという段階には至っていない。それに対して，女子には書くことには前向きに取り組め，長文も臆することなく書くことのできる生徒が多いが，構成を工夫したり，必要に応じて取材したりすることは十分できていないので，意見交流を通して内容を深めることが必要である。

「Ｃ 読むこと」では，図書館の利用も活発で，読書好きな生徒が比較的多いが，各自の好きな分野に偏っている傾向が強く，「目的に応じて」本や文章を読むことが必要である。また，小説など文学的な文章に比べて，説明的な文章の読み取りを苦手としている生徒が多い。発表などには積極的とはあまり言えない状況である。

３年生に進級してから，個人的な配付物として多くの高校のパンフレットやオープンスクールのちらしが配られている。また，学級内の掲示板や進路ルームの窓などに様々なポスターが貼られている。進路のことを意識する生徒が増え，２年時まではさほど意識していなかった生徒もそれらの進路資料を熱心に見つめている姿が日々見られている。

６　指導・支援の工夫

(1) 活用を図る基礎的・基本的知識や技能

①　批評

本学年の生徒は，１年時にスピーチの会を通して，他の生徒の発表に対する一言感想を書いたり，声の大きさ・態度・内容という観点で３段階評価をしたりして，評価批評という活動を経験している。

②　相手意識・目的意識

１年時に手紙文の形式を学び，２年時には職場体験学習のお礼状を各職場に送るという活動を行っているので，相手や目的の意識の大切さは知っている。「しかし，高校の先生へ送ることを想定した批評の手紙は，読む側の気持ちを意識しなければいけないので，言葉遣いだけではなく，話題を進めていく順番など内容の構成も考えなければならないので，３年生としては取り組む意義が深いと思われる。

③　敬語

手紙文を書くときに，３年の５月に学習した「敬語」を意識させながら書くように指導した。

(2) 指導事例に学んだ工夫

①　身近なものを教材に

言語活動事例集［国語－12］第3学年「関心のある事柄について批評する文章を書く事例（書くこと）」は，複数の高等学校のパンフレットの中の事柄について批評する文章を書く事例である。3年生の生徒にとって高校の資料は今一番関心のあるものであり，本校の生徒にこの時期実施するのにふさわしい教材であると思われた。

また，写真・図・絵といった非連続型テキストが中心となっており，PISA型読解力育成にも適している。

②　学習方法の形態

また，［国語－13］第3学年「論説や報道などの情報を比較して読み，書く事例（書くこと，読むこと）」での一般の新聞を数紙読み比べたり，グループで活動したりす

ることも参考にした。

(3) 生徒の実態に応じた工夫

① ポスターの利用

高校のパンフレットでは，情報量が多すぎるので，オープンスクールのポスターという平面の一枚物の教材にすることにした。

② 学習形態の設定

《個人→グループ①（男女別各２～４人）→グループ②（生活班各５～６人）→全体》と交流することで内容が深められるようにした。

③ 批評する観点の設定

一枚のポスターにも高校によっては多くの情報を盛り込んでいる。本単元では「キャッチコピー」・「写真・図・絵」・「レイアウト」の３点の観点に絞って批評をすることとした。

④ 手紙文としての記述

批評する文章を「高校の先生への手紙」という形でまとめさせることによって，相手を意識した内容や構成，敬語を使った言葉遣いの学習が深められると考えた。

7 実践の内容

(1) 指導計画

	学習活動	指導上の留意点
第１時	高校のオープンスクールのポスターをじっくりみよう ・学習の見通しをもつ。 ・ワークシートにポスターの良いところや工夫しているところを書く。 ・各自で書いたことを小グループ内で紹介しあう。	○ 批評とは，対象とする事柄の良さや特徴，価値を論じたり評価したりすることであるとの定義を説明する。 ○ 個人で自由に批評した後，小グループで意見交換することにより，自分の担当しているポスターからの読み取りを深めさせる。 ○ 小グループは生活班を男女２つに分ける。
第２時	２枚のポスターを比べてみよう ・各班（生活班）２枚のポスターを比べてみる。 ・ポスターについての基礎知識を知る。 ・３つの比較する観点についての批評をワークシートに書く。 ①キャッチコピー ②写真・イラスト・絵 ③レイアウト ・前時に作業した２枚のポスターのどちらかの高校の先生に向けた手紙の下書きを書く。	○ 「キャッチコピー」とは，「人の心に強く訴えかける短い広告文」，「レイアウト」は「紙面の構成や文字・写真・色彩などの配列や配置のしかた」であることを説明する。 ○ 良いところだけでなく，改善すればよいと思うところも書かせる。 ○ 班の中で意見を交換しながら，ワークシートにまとめさせる。 ○ ポスターの良いところだけではなく，改善点も手紙に入れるように指導する。 ○ 敬語の使い方に気をつけて書かせる。
第３時	高校の先生にポスターについての手紙を書こう ・前時に書いた下書きを元に，清書用紙に書く。 ・清書を班の中で読みあう。	○ 今回は手紙文の本文のところのみを書かせる。 ○ 手紙を書く活動は原則として個人の作業とする。

(2) 第1時の生徒の様子

黒板に１２枚の高校のオープンスクールのポスターを貼ると「今日は国語はせんの？」という声があがった。「今日は高校のポスターを使って国語の勉強をするよ。だから，机の上は筆記用具とこのワークシートだけでいいよ。」というと，興味津々で机の上の教科書類をしまう生徒の姿が見られた。

まず，グループでの取り組みの前にポスターを個人で見る（読む）時間をとった。その後，各グループで好きなものを一枚持ち帰らせ，教材とした。最初に取り組んだクラスでは，先にポスターを選ばせたが，どれにするか悩んだグループも多く，やや時間をロスした感があった。グループでの席も特に指定はしなかったが，より話し合いがしやすい状況に席の形を工夫するように助言した。２人～４人のグループなので，「一番相談しやすい形」も様々であったが，席を移動してからポスターを取りにこさせると時間の無駄も少なく，作業に取り組むことがスムーズになったように思った。

一枚のポスターでは，他と比べることができないので，「良いところ・工夫しているところ」を書き出すようにさせた。ワークシート（資料３－１）や付せんを利用したが，男女別の小グループなので気軽な話し合いとなったグループが多かった。能力的に，一人ではなかなかワークシートへの記入もできない生徒がどの学級にもいるが，小グループなので比較的記入しやすかったようである。

(3) 中心的な授業における生徒の活動の様子（第２時）

目　標	自分の考えを伝える説得力のある批評の文章を書くことができる。（書く能力）
学習活動	指導・支援・評価における留意点
①　前時のワークシートを振り返り，本時の学習活動の流れを知る。	・　前時には，１枚のポスターについてじっくり見たが，本時は２枚のポスターを見比べて，最終的には「高校の先生への手紙」という形でまとめることを知らせる。
２枚のポスターを見比べて，批評しよう	
②　２枚の高校のオープンスクールのポスターを三つの観点について批評する。 **【評価場面】**	・　班ごとに２枚のポスターを配付し，次の三つの観点について班内で意見交流しながら，批評するようにする。 キャッチコピー・　写真（図・絵）・レイアウト ・　席は班席にさせる。 ・　話し合いがしっかりできている班を称賛し，他の班の意欲を喚起する。 ・　前回は良い点や工夫されている点に絞って批評したが，本時では，改善するともっとよくなると思われる点も挙げるように指示する。 ・　ポスターは中学生のために各高校で熟考して作成しているものではあるが，「中学生としての素朴な意見」という感じで，気がついたことをどんどん書き出していくように促す。 ・　批評のメモが進まない生徒には，前回のワークシートを見たり，班の仲間との意見交流をしたりするように助言する。 **【評価規準】** **積極的に意見交流しながら，２枚のポスターの批評をワークシートに記入している。　〈ワークシート〉（書く能力）**
③　ワークシートに書き出した内容をもとに，高校の先生への手紙の下書きをする。	・　席は個人の席に戻させ，各自での活動とさせる。 ・　必要な敬語を意識して使うように，机間指導をする。 ・　高校の先生に送るという想定の手紙であるので，悪いことは書きにくいと思う生徒も多いと思われるが，「このようにするともっとこう改善するのではないでしょうか。」という前向きな感覚で書いていこうと声かけをする。 ・　内容の構成としては，まず良い点や工夫されている点を書き，その後で改善点を書くほうが，読む側に失礼な感じが少ないと思うと助言をする。 ・　下書きの段階なので，付け加えたり，削ったりしながら，仕上げていくようにさせる。
④　まとめをする。	・　本時の活動を振り返り，次時の活動の内容を知らせる。

高校のポスターを使っての授業も２時間目になると，少し慣れてきて手際のよい生徒も増えたが，興味が少し薄れたような生徒も見られた。当初は，前時にそれぞれの小グループが批評したポスターをそのまま２枚持ち寄って使うつもりだったが，新しい２枚を選んでさせたクラスのほうが結果的には，活発な活動になったようである。

ポスターの見方も，第１時では，机の上に広げてみているだけのグループが多かったが，第２時では，一人が２枚を持って，少し離れたところから他の人が見て，「この部分がわかりやすい。」とか「こっちのほうがここがおもしろい。」といった感じのやりとりをする班が出てきた。ポスターの裏にはもともと掲示用に磁石を貼っていたので，教室の前や後ろの黒板に貼って比べてみる班もあった。

キャッチコピーには，高校側の熱いメッセージが込められているものが多いが，中学生には難しい内容もあり，その観点だけに絞っても１時間活動できると思われた。教室には国語辞典と漢和辞典も用意していたが，それぞれの班にその２冊と英和辞典があるとよかった。また，その高校独自の言葉のようなものもあったので，学校案内もあればよかったと考えられる。

写真（図・絵）は２枚を比較しやすかったようだが，レイアウトという観点と切り離すことは難しかったかもしれない。しかし，生徒は人物写真の表情の違いなどにはよく気がついていた。

第２時では，高校の先生への手紙の下書きまでを活動としたが，内容の構成という点で，書き始めるまでに少しとまどう生徒が見受けられた。助言としては，２枚のうちどちらの高校を選んでもよいが，自分として印象に残ったほうの学校が書きやすいかもしれないと助言した。「改善点を書くことは，高校側に失礼になるのではないか。」という不安を口にする生徒もいたので，「高校の先生は，中学生の率直な意見を大切にしてくださると思うよ。」と助言した。

時間の関係で，本時では，正式な手紙文に必要な「時候のあいさつ」などは省略して，本文だけを書くという活動にしたが，敬語を使う練習という点からは，もう少しゆとりのある流れにして，「拝啓」から「敬具」まできちんと書かせる活動のほうがよいと思う。

(4) 第3時の生徒の様子

実際に授業を実施してみると，第２時の手紙の下書きには個人差があったので，第３時は進んでいる生徒は，清書にすぐ入れるが，下書きが不十分だった生徒は下書きを仕上げることに時間を費やすことになった。

清書ができたら，班の中で手紙を読み比べるという活動をする予定であったが，班の中での各自の進行状況が不揃いであったので，一斉にどの班でも同じ活動に入ることは難しかった。

早くできた生徒には，推敲することで，文章をより説得力のあるものにしたり，班を越えて，早くできた生徒同士で交流したりするように声かけをした。

(4) 学習活動の評価

授業での活動の様子やポスターから読み取ったことがよくわかるワークシートや手紙の下書きや清書を評価の対象とした。

8　成果と課題

受験を意識している三年生の生徒にとって，今一番興味関心があるのが高校のパンフレットや資料である。「高校のポスターを見る」という活動は，取り組みはじめの段階では，教科書の長文よりも気楽な感じがした生徒がほとんどであるが，いざ活動が進んでいくと，平面の一枚物ながらそのポスターに込められた意外な奥の深さに気づいた生徒も多かったようである。個人では，批評することが難しかった生徒が多かったのは，こちらの予測以上にポスターに込められた情報量が多く，また，学校によって様々な工夫が凝らされていたからかもしれない。グループや班での活動によって，個々の生徒のとまどいは意見交流という場によって説得力のある内容に少しずつ深まったが，批評する観点をもっと絞ったり，教材とするポスターの選定の際に熟考したりすることも必要であると思う。

「高校の先生への手紙」は「目上の人への手紙」の中でも，今の三年生にとっては最たるものであると思う。それだけに，悩みながら，言葉を選びながら書こうとする姿が見られた。

普段なかなか取り組めなかった非連続型テキストを使っての学習は，生徒にとっては興味関心が高いものであることもわかった。

このような身の回りの教材，非連続型テキストの教材をどんどん発掘していくことも今後必要と考えている。

《授業中の生徒の様子（第１時）》

《授業中の生徒の様子（第２時）》

Ⅳ　実践を終えて

すべての授業実践を終え，発表資料をまとめる中で気付いたことが三つある。

まず，子どもたちを私の場（プライベート）から公の場（パブリック）へと導き，支えるのが国語科教師の大切な使命ということである。改めて言うことでもないが，小学校学習指導要領国語では「日常生活に必要な国語の能力」を育成することとされており，中学校学習指導要領国語では「社会生活に必要な国語の能力」を育成することとされている。ここで本実践発表における三つの学習活動（言語活動）を再度並べてみると，それがよくわかるであろう。

第１学年：級友に好きな本を紹介する。

第２学年：中学校からの案内文を保護者向けに書き換える。

第３学年：高校のポスターを批評し，高校の先生あてに手紙を書く。

いずれの活動にも「私の場」「公の場」があるが，「公の場」の比率が次第に高くなっている。

中学校卒業後には「公の場」で活躍できるよう３年間を見通して，指導計画を作成，修正していくことは当然のようで，実のところあまり意識せずに授業を進めてはいないだろうか。ついつい目先のことに追われてはいないだろうか。新しい中学校学習指導要領，新しい教科書になる平成24年度以降の大きな課題を再確認できた。

次に，「学び合い」「教え合い」「伝え合い」の重要性である。いずれの授業実践でも中心的な学習として取り組んでいる。しかし，これは４人の授業実践者が当初から打ち合わせ，共通理解の後に実践したわけではなかった。実践の構想をそれぞれが練る中で共通して取り組もうとしていることが判明したのである。ということは，４人の実践者はみんなその必要性を認識していたことになる。「伝え合う力」の育成を図る意味でも，協力と競争の原理をもって学習意欲を高める意味でも，授業改善の大きな視点を見つけることができた。

最後に，残念なこととして，十分な教育実践研究にすることができなかったことがある。その最大のポイントは，効果の検証があまりできていないことである。教育効果の数値化は難しいことではあるし，生徒たちに不公平感が生まれやすいため，対照となる授業を行うのはためらいが感じられる。このような理屈を付けて避けてしまった面があった。今後の大きな課題である。

Ⅴ　おわりに

同じ中学校の同じ国語科教師であっても，ふだんの勤務では諸事に追われるばかりで，なかなか国語科授業づくりについて語り合う時間がとれない。せいぜい同学年担当者が授業の進度やワークシート類の活用を打ち合わせるぐらいである。

今回の実践発表では，それぞれが忙しい中でも時間をやりくりして，国語部会をたびたび開いた。そこで国語科授業づくりについて語り合い，尋ね合うことのなんと楽しかったことか。時に脱線した話になり，異様に盛り上がってしまったことも含めて，味野中学校の国語科教師であることが，幸運に思えた時間であった。

この充実感が私たちの自己満足に終わることなく，生徒たちのためにこそ授業の工夫・改善に努めていくことを約束して，筆を置くことにする。

＜参考・引用資料＞

言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】：文部科学省，平成23年５月
中学校学習指導要領解説　国語編：文部科学省，平成20年９月
中等教育資料　平成23年６月号：文部科学省，ぎょうせい